



Title	有島武郎の研究 [全文の要約]
Author(s)	中村, 建
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第15981号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/92260
Type	theses (doctoral - abstract of entire text)
Note	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。
Note(URL)	https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
File Information	Takeru_Nakamura_summary.pdf



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名：中 村 建

学位論文題名

有島武郎の研究

本論文は、有島武郎の文学テキストにおいて恋愛がどのように表現されたのか、また彼の文芸様式と恋愛がどのように関係するのかを明らかにした上で、有島の恋愛や人間関係を題材とした文学テキストを再評価することを目的とし、序論および結論と本論（全三部九章）から構成される。

序論「有島武郎研究の現在、および本論の問題設定」は、従来の有島研究を概観した上で、有島の文学テキストにおける恋愛の問題を主として「恋愛の多角性」の観点から再検討する必要があることを示すもので、全三節で構成される。1「有島武郎研究史の現状と課題」においては、有島の創作史および有島と恋愛との関係についての評価や研究史を概観した。前者については、小説『或る女』（大8・3、6、叢文閣）を頂点とする評価が根強いために同作以前／以後の作品への評価が低いことと、戯曲への目配りが少ないことを指摘した。後者については、有島武郎自身の恋愛や情死に関するものが中心であり、有島が評論などで提唱した「恋愛の多角性」の問題については余り取り上げられてこなかったことを課題として挙げた。2「本論の目的と方法」においては、前述の研究の現状を踏まえた上で、①「有島武郎の文学において、恋愛はどのように表現されたのか」、②「有島武郎の文芸様式と恋愛がどのように関係するのか」という二つの問題設定を立てた。これらの問いに答えるために、本論文の主要な方法として、①有島と同時代の恋愛論の流行を踏まえた多角的恋愛論の参照、②研究対象としての戯曲の重視、③小説や戯曲を分析する際の比較文学の導入を挙げた。3「本論の構成」においては、本論文の構成を示した。

第一部「有島武郎文学における方法の多元性」は、本論第二部以降で扱う、有島武郎の恋愛を題材とした文学テキスト及び彼の文芸様式を論じる際の基盤となる部分である。有島の提唱した「恋愛の多角性」を中心に考察しつつ、有島文学における個人と他

者の関係、そして多元的焦点化という手法についても論じた。

第一章「同時代の恋愛論における有島武郎の位置」では、大正時代後期に流行した恋愛論における有島武郎の位置づけを明らかにするとともに、有島文学における「恋愛の多角性」の意義について述べた。当時の恋愛論の主流は恋愛を経た結婚とその永続という、永続的一夫一婦制を主張するものであった。当時の恋愛論においては永続的一夫一婦制という理想の一方で、現実におけるその困難さも認識されており、両者の溝をどう埋めるのかが重要なトピックであったことを明らかにした。また、倉田百三など他の論者の多角的恋愛論では欠如しがちであった恋愛の客体となるという側面を、有島は考慮していたことを指摘した。自身に多角的恋愛の傾向がある一方、他者の多角的恋愛の対象となった際の嫌悪感という問題が、有島の恋愛を題材とした小説や戯曲で描かれたと論じた。

第二章「個人と観念的自然の関係」では、有島が主に芸術論で主張した、個人の融合の対象としての観念的自然という概念から、『或る女』前編第十三章の「夢幻」的な場面の分析を試みた。この「夢幻」的な部分で葉子は海から不気味な声を聞く。この体験は後編第三十七章でも繰り返され、さらに戯曲「断橋」でも言及されている。この海からの声は葉子にしか聞こえないものであり、彼女の経験の個別性と、個人と他者の不透明な関係について論じた。この海からの声は、他者と完全に一体化してしまった自己の謂であり、完全に自己を失ってしまった存在への恐怖感から葉子は、複数の男性の中から倉地という一人の男性を選ぶことになったと解釈し、ここに多角的恋愛の限界があることを論じた。ここには、個人と他者とが完全に透明でも完全に不透明でもない関係が描かれており、そのような問題が他の有島のテキストにも見られることを指摘した。

第三章「多元的焦点化という手法」では、これまでほとんど論じられなかった、馬車馬とその馬車の御者・乗客を題材とした短編小説「凱旋」(『文章世界』大6・10)を扱った。この小説の結末部では登場人物のそれぞれに焦点化するという、多元的焦点化の手法が用いられる。このような結末部は、同時代では「散漫」とされて不評であり、特に一元描写を唱えた岩野泡鳴から強い批判を受けた。しかし、この多元的焦点化の手法が、社会の様々な位相にある人々を多面的に描くために必要なものであり、後年の『星座』に繋がるものであったことを明らかにした。

第二部「有島武郎の恋愛を題材とした小説」は、有島の恋愛を題材とした小説を、恋愛の多角性という観点を中心に、再評価を試みた。

第四章「突然変異と恋愛の不確かさ」では、生物学を専攻する男性 A・B と女性 Y 子の三角関係を題材とした書簡体小説『宣言』（大 6・12、新潮社）を扱った。作中の A・B の書簡には、西欧の恋愛物語などを初めとする多くの書物が引用され、それらの引用に自身を擬えながら恋愛を進展することによって、「運命」が事後的に作られる側面を論じた。また、書簡に突然変異説が引用されていることに注目し、同説が三者関係の変異のみならず恋愛そのものの不確かさを示唆する機能を有していることを明らかにした。以上の分析を通じて、従来真の「覚醒」を果たしたとして評価されてきた Y 子をも相対化した。さらに、三者関係に巻き込まれた A の妹・N 子は物語の結末には収斂されず、そのような物語の構造に収まりきらないような人物の存在が、「凱旋」や『星座』のような、ある意味散漫な印象を与える有島の様式に繋がるものであることを指摘した。

第五章「身体・内面の関係と混迷する恋愛」では、日露戦争期のアメリカに滞在する日本人留学生・A の性と恋愛の遍歴を辿った『迷路』（大 7・6、新潮社）を扱った。従来、本作は A の人物造型が観念先行とされ、特に不倫相手の夫人の「胎児」へ執着が不自然であると批判されることが多かった。これに対して、A の混迷した内面（精神）は決して観念先行ではなく、彼の身体と密接に関連しており、彼の身体状況によって胎児への執着が変化することを明らかにした。その上で『或る女』の葉子との関連性を指摘しつつ、A の内面の混乱を混乱のままに呈示することによって恋愛の不確かさや恋愛の不随意性を表現する小説であることを論じた。

第六章「多元的焦点化の展開」では、札幌農学校の学生たちと彼らにまつわる人々を題材とした未完の長編小説『星座』（大 11・5、叢文閣）を扱った。この小説が、個人同士の連帯による全体性を指向するものであるのか、あるいは個人間の孤独を表現するものであるのかという解釈の対立を踏まえた上で、少女と彼女の家庭教師を務める学生たちの関係を中心に論じた。学生たちのコミュニティの内部においてはある種の全体性を有する一方、その外部にいる女性や労働者の学問へのアクセスが阻害される点では、個人同士が隔絶されていることを明らかにした。ただし、学生たちと外部との接続の可能性も示されていることも指摘した。このように、全体性／隔絶のどちらにも回収されないような関係は、多元的焦点化によって小説全体が叙述されることによって達成されると評価した。

第三部「有島武郎の恋愛を題材とした戯曲」は、有島の戯曲においても、小説と同様に恋愛の多角性の問題が反映されていることを明らかにするとともに、有島の作劇法に

についても論じた。

第七章「夫婦愛の不可能性」では、病死する妻と彼女を看病する夫を描いた「死と其前後」(『新公論』大6・5)を扱った。夫婦の「愛の勝利」という同時代の解釈の背景には、当時の日本において『アグラヴェーヌとセリセット』などのメーテルリンクの戯曲が運命を直感的に表現しているという、ある意味神秘主義的な受容があったことを論じた。その上で、本作が一方では夫婦愛の勝利を描きつつ、他方では、人物間のコミュニケーションの不全や、妻以外の女性に誘惑を感じたという夫の告白といったノイズの存在は愛の不可能性を露呈するものであったと解釈した。

第八章「青年画家たちとモデルの女性の関係」では、マーク・トウェインの短編小説「彼は生きているのかそれとも死んでいるのか」と近松門左衛門の浄瑠璃・歌舞伎『けいせい反魂香』(『傾城反魂香』)のアダプテーションであり、青年画家たちとモデルの女性を題材にした「ドモ又の死」(『泉』大11・10)を扱った。原作と比較しながら、商業主義の時代における芸術家への評価の在り方を諷刺したものであることを論じた。その上で、『星座』との人間関係の類似性を踏まえながら、最も見込みがないと思われた画家・ドモ又を、モデルの女性・とも子が夫として選ぶという一見美しい物語の背後に、それを裏切るようなノイズも存在することによって、単純に収斂に向かうようなテキストではないことを論じた。

第九章「接続と断絶の手法」では、国木田独歩の小説「鎌倉夫人」、「運命論者」と有島自身の『或る女』後編第三十七章のアダプテーションであり、葉子と彼女に関わる男性たちを描いた「断橋」(『泉』大12・3)を扱った。諸原作に比べて本作では枯淡・空虚な様相が強まっていることを、他者との断絶という晩年の有島の認識を踏まえつつ論じた。その一方で、橋渡しという設定には、他者との接続の可能性が示されていることを明らかにした。このような断絶しつつ接続するという在り方は、アダプテーションによる作劇という有島の戯曲においてしばしば用いられた手法とも重なるものであることを指摘した。

結論「本論の成果と課題」は、二節で構成される。1「本論の成果」では、本論文で展開した議論を各部ごとに整理し、その成果を確認した。その上で、序論で立てた問題設定に対して次のように結論づけた。①「有島武郎の文学において、恋愛はどのように表現されたのか」については、運命的な対一の関係を否定するような、恋愛の不確かさや恋愛の不随意性が繰り返し描かれたものの、有島が提示した「恋愛の多角性」は、

決してユートピア的なものではなかったと論じた。また、有島文学における恋愛を初めとした人間関係において個人間の関係は完全に融合／断絶したものではないとまとめた上で、無媒介で透明なコミュニケーションを求めつつもそれを妨げる障碍を排除することができないという接続と断絶という中間性が有島の小説および戯曲において繰り返された主題であったと評価した。②「有島武郎の文芸様式と恋愛がどのように関係するのか」については、恋愛の多角性によって人間関係が多角化され、物語の収斂を阻むようなノイズも生じることによって、ある意味「散漫」な印象を与えるような物語の様式を産んだと論じた。この様式は、小説の場合には多元的焦点化による叙述、戯曲の場合には劇的な構造に抵抗するようなノイズの存在という形で展開されたと評価した。2 「本論の課題」では、本論文の成果を踏まえた上で、最新の恋愛論の知見、小説と戯曲を統合するような文学理論の必要性といった方法・理論における不足と、現在有島の代表作とされる『或る女』と「カインの末裔」を詳しく論じることができなかったことを本論文の限界として挙げた。また、今後の課題として、有島文学における個人の恋愛と国家の問題の関係のさらなる考察、倉田百三など同時代の他の作家の恋愛論や戯曲の分析を挙げた。